

カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第18回 ジュアン・ピラ=グラウ 氏 Joan Vila-Grau 画家、ステンドグラス作家

「太陽の動きに合わせた光の色をつくる」



左から：ジュアン・ピラ=グラウ氏、アトリエ風景、故ジュアン氏のご家族

今回はサグラダ・ファミリアのステンドグラスを設計デザインしたジュアン・ピラ=グラウさんについてです。残念なことに昨秋に他界されましたが、そのアトリエを訪ね、芸術一家である彼の息子や孫たちに話を聞くことができました。

JVGファミリー 今日はスタジオに来ていただいてありがとう。父はここでサグラダ・ファミリアのステンドグラスのほとんどの部分をデザインしました。そのデスクです。日光を当てながら光の具合を確認していったんです。他のステンドグラスもこの光の中でデザインしましたし、画家、版画、テキスタイルデザインとみなここから生み出されました。彼は亡くなるまでの18年間、サグラダ・ファミリアのプロジェクトを立ち上げ作業していましたが、それと並行して画家、マルチなアーティストとして仕事を続けてきました。

AMICS 今日はありがとうございます。お会いしたかったのは、サグラダ・ファミリアのステンドグラスは誰が、いつ、どうやって作ったのか？ガウディはこういうステンドグラスを意図していたのか？をぜひ伺いたかったからです。サグラダ・ファミリアに入った人々がまず感動するのはステンドグラスから差し込み反射する様々な色彩の光です。昨年東京では「ガウディとサグラダ・ファミリア展」が開催され大変な賑わいを見せました。ですが、サグラダ・ファミリアの建築や彫刻については詳しく説明されている一方で、ステンドグラスについては全く語られていないんです。

JVG そうでしたか。父は常に自然の中に美を見出していました。特に東洋の美に興味を持っていました。そして光、教会にとって光は最も大切な要素の一つで、限りなく自然であり、美しいものでなければいけないと考えていたんです。サグラダ・ファミリア教会(のステンドグラス)は太陽の動きに合わせた光が、日の出から日の入りまで常に最高の美しさを発揮できるよう考えて設計されています。生誕のファサードはブルー。最も美しいのは日没、それは死を意味します。つまりキリストが亡くなる受難のファサードはオレンジ、赤。この変化する色彩を太陽の動きに合わせて、教会の中に最高の光の表現をもたらすことができます。

お見せしましょう。これがサグラダ・ファミリアでの最初のアイデアです(シートを提示する)。これは平面ですが東から昇り西へ沈むまでの太陽光が一つのストーリーをつくっています。「日没の時の燃えるよ

うな赤い太陽を見た」と私に話してくれたのをよく覚えています。そこに至る太陽の光の移ろいが表現されています。サグラダ・ファミリアはカトリックの教会ですが、そこを訪れるのは世界中から様々な宗教、異なる文化の人々です。太陽の光はそのような人たち誰にとっても違和感のないものなのです。



JVGが作成したサグラダ・ファミリアのカラーチャート

AMICS ステンドグラスのプロジェクトはどのようにして、いつから始まったのでしょうか

JVG プロジェクトは1999年に始まりました。歴代の建築監督の一人であるジョルディ・ボネット氏と父は小さい時からの付き合いで二人ともボーイスカウトです(笑)。内戦の後、建築だけでなく、他のアーティストも巻き込んだデザイン集団「アルザンクラフト」を一緒に作り、様々な芸術活動を推進して来ました。サグラダ・ファミリア以前にも他の建築物を一緒に、仕事ぶりもよくわかっていたので、サグラダ・ファミリアのステンドグラスに取り掛かるにあたってボネット氏は父に最初一枚だけ依頼して来たんです。それがいい印象でしたので全部父が進めていくことになったんです。

父は中世からのステンドグラスについての理論を調べ上げるだけでなく、アーティストとしての実践方法をこの本にまとめています。1999年には彼はスペインだけでなく欧州の中世ステンドグラスの専門家でした。ご覧の通り中世のステンドグラスの図柄は聖人や聖書のシーンが表現されています。ですが彼はサグラダ・ファミリアはそれではいけないと考えました。最終的に決定したのはそれらは使わず「色のみ」で表現するということでした。ボネットに最初一枚を依頼された時に「自分は抽象画家だから、それに基づいたものになるよ」という話をしていたそうです。

色の中に聖書の感動やシンボリズムを見てとることができます。

死、つまり受難は赤というように、色は全てのものを表すことができます。一枚のステンドグラスには色々な赤が組み込まれています。聖書がいつていることを色で表す。色こそがだれもがわかってもらえる感覚です。一つの窓だけではなく最初から最後まで一貫して色彩の移ろいを見てもらうことで、作品として捉えられるステンドグラスを設計しています。

AMICS 教会にステンドグラスが入ったのはいつですか？

JVG 作家がプロジェクトを作り、主任建築家の承認が得られれば、ガラス工場で職人製作に入り、終わったところから2、3年をかけて設置しました。2010年にサグラダ・ファミリアでローマ法王がミサを執り行いました。それに合わせて作業が進められ、ミサの段階で大部分のステンドグラスが設置されました。このミサでサグラダ・ファミリアは晴れてバシリカ(礼拝堂)と呼称されることになったんです。全ての設置が終了したのは2017年です。

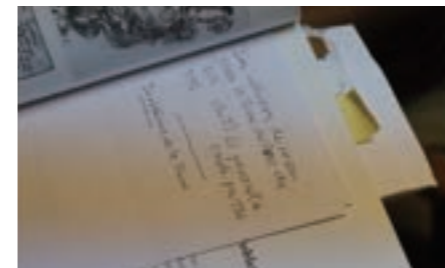
中世のステンドグラスは耐久性があり今でも色褪せることがありません。サグラダ・ファミリアのステンドグラスも当時と同じ製法で作っているので、この先、同じように何百年先まで輝き続けます。鉛のフレームにガラスをはめ込んでいるのですが、大きくなれば安定させるために鉛だけでなく鉄も入れなければなりません。サグラダ・ファミリアでもそうしているのです。

AMICS ということは設置し終わってから今年でたった6年ですか！もっと昔からあったのだと思っていました！あれだけ建物と見事に一体化しているのですから。

JVG 一つの見方をすればあの光と色に満ちた空間はガウディのアイデアというよりも、その時の建築監督であるボネットの采配によって完成させられた作品だと言えます。ボネットと長く一緒に働いて来た父との調和が実現させたと思うんです。もちろんサグラダ・ファミリア全体はガウディの建築作品ですが、ディテールはそうではありません。その決定というのは建築監督や建築家グループが決めていくのです。その時に一緒に働いていたチームの作品として見ていただくという側面もあります。

ステンドグラスが入る前ですか？ただのすりガラスでした。サグラダ・ファミリアの建築スピードは遅いです。この教会自体は罪を贖罪するための教会なので、建築費は寄付で賄っています。少しずつ進まなければいけないんです。サグラダ・ファミリアのプロジェクトがはじまった19世紀後半のカタルーニャには政治、社会的にも暴力が蔓延っていましたから「贖罪」が目的になったのです。

AMICS ガウディ自身はステンドグラスについての指示、あるいはイメージは残していたのでしょうか？受難のファサードではスケッチを残していますよね。



ガウディの資料にJVGが残したいくつかのメモ

JVG 建築自体を始めるときには、どういう教会にするのかとともに、ステンドグラスをどのようのものにするのかは話されたようです。ただしガウディが残していたものは最低限のもの、というよりほとんどありませんでした。祖父は手がける前からガウディの残した言葉や文献を図書館で調べ、ガウディのロジックを推察してデザインにかかったそうです。この部屋の書庫はガウディに関する図書館です。ガウディが残したのは「訪れる全ての人のための教会である」こと。「光が調和した教会であること」といっています。まずこの二点でした。一般的でわかりにくいですね。カトリック信者にとってこれをどう解釈したらいいのか掴みにくくさらに調べたようです。

「光はハーモニーである」「最高のアーティストは太陽の光である」この言葉を祖父はガウディの文献から見つけました。ガウディは色についてはそれ以上に青とも赤とも言っていません。祖父は日が昇り、日が沈むまでの一連の光の動きをどう色彩で表現するかに注力しました。さらには上部を明るい光に、下に行くに従って明度が落ちていくようにする。つまりゴシック建築のステンドグラスとは逆の発想です。ゴシックが優勢だった頃はカタルーニャにとっても栄華の時代だったと言えます。ガウディはサグラダ・ファミリアで究極のゴシック教会をめざしたといわれますが、父の解釈ではそれはゴシック様式でありながら、ゴシック的なものの少ない教会になります。ガウディの非常に短く少ない言葉が逆に、アーティストにとっては自由に創造性を膨らませながら制作するプロセスをもたらしました。

AMICS ガウディはサグラダ・ファミリアが今のアーティストが作品を展示できる「場」になることを望んでいたとも言えますね

JVG そうですね。ガウディは次の世代が来て、ここが完成するのだと言っていました。贖罪のための教会の資金は市民から集めるわけなので長い時間がかかるということはわかっていました。募金ですので集まった資金でその都度作っていくしかない。90年代まで子供達も缶を持って資金集めをしたんです。もともとガウディだって生前はそれほど評価されていませんでした。私たちは「サグラダ・ファミリアみただね」という表現を使うことがあります。それは「長い時間がかかっていつ終わるのかわからない」という時に使うんです(笑)。

AMICS コロナ前には2026年にひとまず完成と言われていましたが、まだ栄光(グロリア)のファサード(門)が残っていますね。あそこにはどんなステンドグラスが入るのでしょうか？どんな進行具合なんですか？

JVG 2026年かどうかは分かりませんが、だいたいその頃かもしれないですね。もうデザインは完了しています。でもファサード(門)自体ができるまでは契約上、だれにもお見せすることはできないんです。ステンドグラスが一番難しいことは、通過してくる光が印象的であることに加えて、その光がどう屋内で反射、変化し、広がっていくかということなんです。変化していく図柄です。栄光のファサードの内側にはスピラックスの制作したカタルーニャの守護聖人サン・ジョルディの像があります。あれも披露されるかなり前に完成していました。ですので、あの場所の作業がもっと進んだ段階で、すでにできつつあるステンドグラスが設置されるんです。誰もサグラダ・ファミリアが完成するとは思ってないようですが、ステンドグラスについてはそれが最後です。そう、父はスピラックスとは友達でした。

AMICS アーティストと建築家の連携(というか連帯！)や意思疎通は、カタルーニャの特質のように感じます。そのカタルーニャでまさしく芸術一家の皆さん3名はどんなことをこの先進めていくのでしょうか？

JVG 2017年にサグラダ・ファミリアのステンドグラス原画の展示会が開催され4万人も観客が訪れました。父の死の前からアート財団を作ることが決まり、私たちはその方向に動いています。ステンドグラスだけでなく父の抽象画も含めた作品展を企画していきます。アジアで評判になる可能性が高いと思っていますから、ぜひ日本の方々にも見ていただきたいです。

【AMICSの眼】

ガウディとサグラダ・ファミリアについて、なぜステンドグラスの経緯が紐解かれぬのだからと思いついてきた。2016年に初めてあの空間に入った私は、その光と色がもっと前からあるものだと思っていた。それがつい最近のことだったとは！ガウディの「次の世代の人が・・・」の言葉がこうやってまだまだ先に続いていく、カタルーニャにとってサグラダファミリア・ファミリアはそうあってほしいと感じた。

(取材/文 原正彦)